

伊吹山花だより

第58号 (令和4年4月)

上野区：ユウスゲと貴重植物を守り育てる会

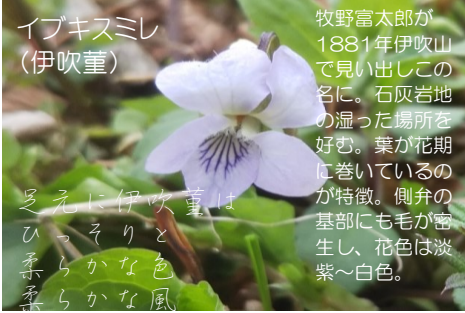
伊吹山に文々の大雪を降らせたこの冬も終わりを告げ、日差しも暖かな春を迎えました。

依然続くコロナ禍ですが、伊吹山の自然の中で、密を避けながら、ゆっくりと穏やかな時間を過ごしていただければと思います。



セソブソウ
(節分草)

春の訪れをひっそりと告げる。日本固有種。春早く節分のころに咲くのが和名に。石灰岩地を好む。純白の和紙のような5枚の花弁のように見えるのは萼片。花弁は黄色の部分で、内部は青紫色の蕊をつける。白・黄・青色の取り合わせが面白い。



イブキスミレ
(伊吹堇)

冬元に伊吹堇はひっそりと柔らかな色柔らかな風

牧野富太郎が1881年伊吹山で見出しこの名に。石灰岩地の湿った場所を好む。葉が花期に巻いているのが特徴。側弁の基部にも毛が密生し、花色は淡紫～白色。



カタクリ
(片栗)

うっついて刺さる、押しながる、お月より静かに花盛り色し

地下の鱗茎の姿が栗の片割れに似ることから和名に。葉は2枚で、花は茎頂に1つ下向きで、1時間ほど紅紫色の花が反り返り咲く。種子から芽が出て花が咲くまで8年。



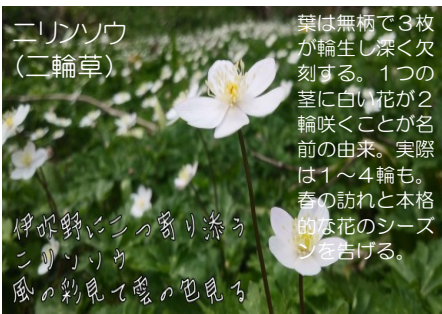
コセリバオウレン
(小芹葉黄連)

初恋のような白さの、コセリバオウレン。気づかれぬように小さく小さく早春雪解けの頃に開花する。名前の由来は、根茎を乾燥させ黄連という生薬に、葉は芹に似、小さいことから。花は白色で横向きにつく。



ユウスゲサイシン
(薄葉細辛)

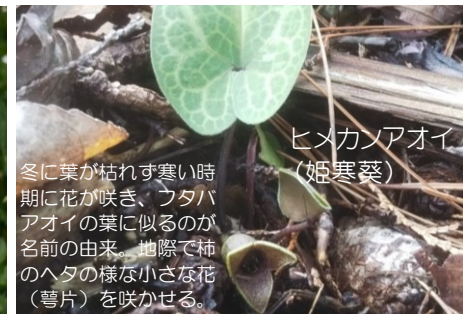
山麓で風に隠れてひっそりと熾火のような薄葉細辛。細くて辛い根を乾燥させた生薬を細辛と言ひ、葉が薄いのでこの名に。2枚の葉柄の間から柄を出し暗褐色の花がつく。萼片の先を摘まんだ様に持ち上げ



ニリンソウ
(二輪草)

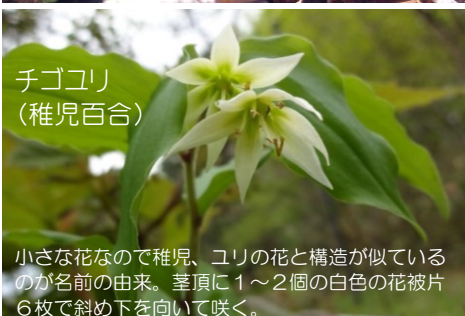
伊吹野にこの寄り添うニリンソウ風の彩見て恋の色見る

葉は無柄で3枚が輪生し深く欠刻する。1つの茎に白い花が2輪咲くことが名前の由来。実際は1～4輪も。春の訪れと本格的な花のシーズン告げる。



ヒメカンアオイ
(姫寒葵)

冬に葉が枯れず寒い時期に花が咲き、フタバアオイの葉に似るのが名前の由来。地際で柿のヘタの様な小さな花(萼片)を咲かせる。



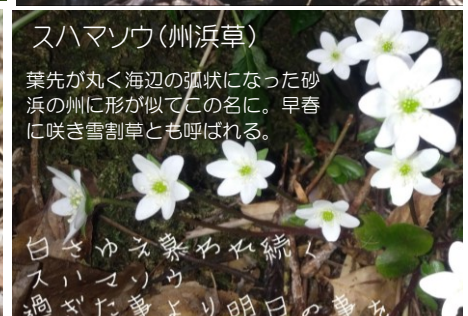
チゴクリ
(稚児百合)

小さな花なので稚児、ユリの花と構造が似ているのが名前の由来。茎頂に1～2個の白色の花被片6枚で斜め下を向いて咲く。



ヒトリシズカ
(一人静)

2対のつやのある葉が十字形に対生。その中心に1本の花穂がつく。花は花弁も萼もないおしべだけ目立つ。名前は静御前の舞姿を連想した。



スハマソウ(州浜草)

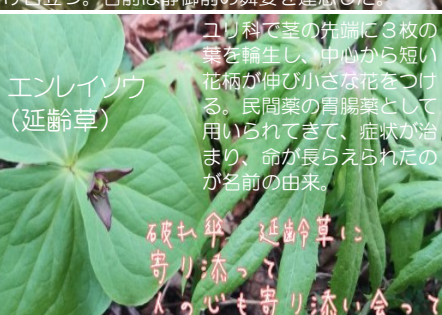
葉先が丸く海辺の弧状になった砂浜の洲に形が似てこの名に。早春に咲き雪割草とも呼ばれる。

白さゆえ慕われ続け、スハマソウ。過ぎた事より明日の事を



イカリソウ
(碓草)

4枚ある花弁は細長い筒状で、先が尖る姿が船の碓に似ているのが名前の由来。花は4枚ずつの萼弁と花弁からなり、距が目立つ。花色は紅紫色、白色、中間色と様々。



エンレイソウ
(延齡草)

ユリ科で茎の先端に3枚の葉を輪生し、中心から短い花柄が伸び小さな花をつける。民間薬の青腸薬として用いられてきて、症状が治まり、命が長らえられたのが名前の由来。

破れ傘、延齡草に寄り添って人の心も寄り添い会って



ヒロハノアマナ
(広葉の甘菜)

アマナは球根を煮て食べるが甘味があるのが名の由来。ヒロハノアマナは葉の幅が広く中央に白線があり、内側に巻き込む3個の包葉が特徴。環境省絶滅危惧Ⅱ種



ヤマエンゴサク
(山延胡索)

生薬の延胡索が名前の由来。花は総状花序に5～10個程の花をつける。花冠は、一方が唇形のように開き、長い筒形の距がある。青紫色から赤紫になる。



フデリンドウ
(筆竜胆)

秋咲きのリンドウの仲間、陽が射すと花が開き、陰ると閉じる。閉じた時の様子が筆の毛先に似るのが名前の由来。花は、漏斗状の青紫の小さな花を1～10個程つける。



キラソウ
(金瘡小草)

唇弁は蘭の花を思わせ花色が紫色なので紫蘭草が転訛してキラソウに。地際に放射状に入ら形の葉を展開しそこから茎を伸ばす。別名に薬草由来で、地獄の釜の蓋、医者殺しとも。

